OPINION
オピニオン・スライス
SLICE

落語家

桂 歌丸さん

笑いのある人生

—— 落語家になられて65年ということですが、落語家になられたきっかけは。

一番のもとは好きだったからでしょうね。それに、戦中戦後の人間ですから、まるで笑いのない時代だったんですよね。

—— 歌丸師匠は、戦争を経験されているんですよね。

戦争たってまだ子どもですから。ただ、私は個人疎開に行っちゃったんですよ。だから、空襲で逃げ回ったというのは知らないんです。地元の横浜が焼けてるのは見てましたけどね。というのは、おふくろの実家がある千葉の真ん中ら辺に疎開していたんですけど、そこからちょっと高い丘に登ると、横浜のほうが東京湾を通して見えるわけですよ。5月29日かな、横浜大空襲があって、あれは昼間でしたからね、煙が出てて、ああと思ってましたけどね。

—— 戦後も、笑いのない時代なんですか。

だって、戦後でそういうどさくさでしょう。みんな食うこと、生きることに夢中で、笑いなんて何もありゃしませんよ。そのころは今みたいにテレビも何もなくてNHKのラジオだけで、週に2回、寄席の演芸番組があったんですよ。そのラジオを聞いて、もう亡くなった昭和の名人と言われている人たちがわっわっと笑わせているわけですよ。つまり、お客さんも笑いに飢えているわけです。今で言うばかウケですよね。それで、これからは笑いだと。それで小学校4年のとき、俺は落語家になると。

—— 戦時中は禁演落語や国策落語があったと聞きました。

例えば女郎買いの噺ですとか間男噺ですとか、あとは泥棒の噺かな、みんなだめになっちゃったわけです。それに、そのころは「長屋の花見」を改作して「長屋の防空演習」とか、そういう改作物というのが大分あったらしいです。だから、落語も随分変わっちゃったんでしょうね、その当時の落語ファンにしてみれば。でも、しょうがないですよ、それしか聞けないんですから。

聞いたところによりますと、客席の一番後ろに臨検席というのがあって、つまり早い話がおまわりさんが座ってるわけですよ。噺でも芝居でもそうですけど、やっちゃいけないようなところがあると、「中止ー!」と。

それでもうこれ(手錠をかけられたジェスチャー)になっちゃう。今も言ったとおり、色っぽい噺や何かやっちゃいけないとなってて、そこへぽっと何かやると「中止ー!」と言われるんです。それに逆らえばこれになっちゃいますからね。

—— やらざるを得ないと。

そうそう。だから、まともな噺しかできないわけですよ。まともと言っては変な話ですけど、真面目な噺。おもしろかねぇやね、真面目な噺なんてね。

戦後でも芝居小屋なんか行きましたら臨検席が残ってましたよ。ちょうどお風呂屋さんの番台みたいになってて。

—— お話を聞かせていただいても歌丸師匠は声がすごくきれいですが、発声法とかは努力されているんですか。

別に何もないです。オペラ歌手じゃないですから、発声練習も何もしませんしね。ただし、噺家になったときに、私の大師匠の5代目の古今亭今輔が、若いうちはなるたけ大きい声で喋れと言ったんです。年をとるとだんだん声が小さくなってくる、だから若いうちに気取って小さな声で喋ってると、年をとると聞こえなくなっちゃうと。だから、できる限り大きい声で喋れ、そういう教育を受けたんです。今輔一門は本当に大きい声でしたよ。それで今でも大きな声は出るんですがね、肺気腫を患ったおかげで苦しくなってくるんです。これが今のところちょっと苦難ですけれどもね。

Interview with
Utamaru Katsura

―― 師匠も色々病気をされていますよね。

もうね、病気のデパートみたいなものですからね。

―― 病気をされて不安になることはないですか。

ないですね。だって、病気になればお医者さんに任せておくよりしょうがないですもん。自分ががたがた言ったってしょうがないです。あとはお医者さんの責任ですよね。

―― 歌丸師匠といえば笑点ですね。

笑点は、回答者を40年、司会が10年、これでちょうど50年になります。第１回目からですから。

―― 歌丸師匠にとっての笑点とは。

ああいう大喜利物というのは噺家でなければできないものですからね。昔から大喜利物というのはあるわけです。それで、たまたまああいう番組に出してもらって、世間の人が言えないようなことを代弁していると思って、政治家のことでも世の中のことでも全部喋っちゃいます。それで視聴者の方々に憂さを晴らしてもらう。そんなような役目になっちゃったわけですね。別に役づけを決めたわけじゃないんですけれどもね。だから、政治家の悪口だって何だって随分言いましたよ。

―― 歌丸師匠の回答には、そういうイメージがあります。

あるときね、飛行機の中で通路を挟んである政治家が向こう側の窓際にいたんです。降りるときにその政治家がすっと私のところに来て「あんまり政治家の悪口言うなよ」と。だから「悪口言われるような政治家になんなよ」って言ったら、黙って行っちゃった。

―― 政治家は冗談ではなくて普通に言ってきたんですか。

うん、言ったんですよ。多分、悪口言われたんでしょうね、それで言ったんでしょうね。なに、口きかせればこっちのほうがよっぽどうまいですから。

―― 格好いいですね。回答はセンスなんですか。

どうなんですかね。聞かれてもあんまり分かんねぇんだよね。ぽっと浮かぶこと、ひょっと思い出したこと、それがぱっと答えに出るわけですからね。問題を出されてうーんとこうやって考えちゃうとおもしろい答えなんか何も出ないですからね。ぱっと頭に浮かんだ答えが一番おもしろいです。一番うまい答えです。これは不思議ですよ。どうしたもんだとこうやって考えちゃうと理屈っぽくなっちゃうからね。あるいは、ウケなかったりね。

―― ぱっとひらめきだと。

ひらめきですね。その頭の回転をどうするかってのが個人個人の問題ですよね。そのひらめきが速くひらめくか、あるいは一瞬遅くなるか、あるいは二瞬遅くなるか。

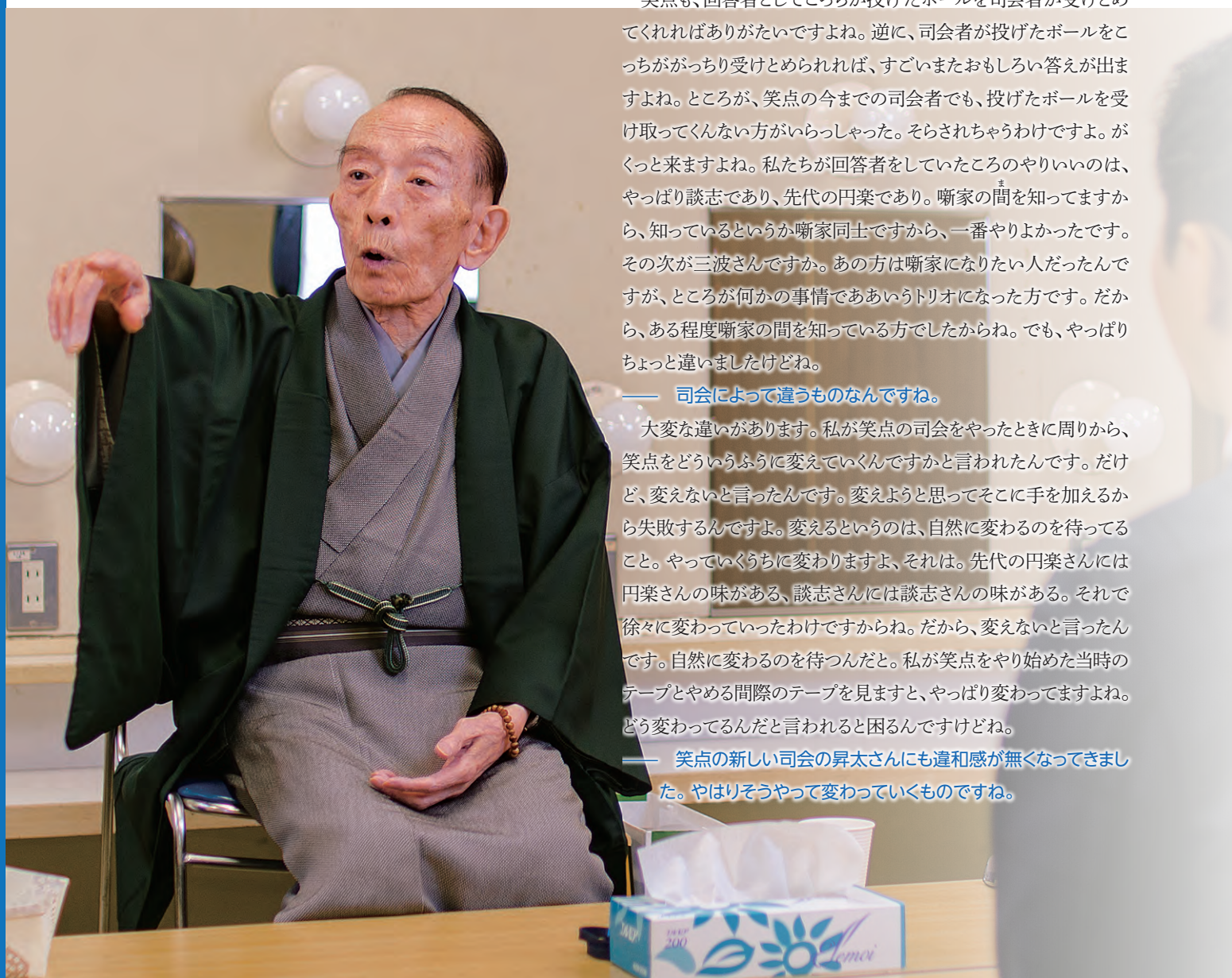
―― 先程の政治家への返しなんかもお見事ですもんね。

笑点も、回答者としてこっちが投げたボールを司会者が受けとめてくれればありがたいですよね。逆に、司会者が投げたボールをこっちががっちり受けとめられれば、すごいまたおもしろい答えが出ますよね。ところが、笑点の今までの司会者でも、投げたボールを受け取ってくんない方がいらっしゃった。そらされちゃうわけですよ。がくっと来ますよね。私たちが回答者をしていたころのやりいいのは、やっぱり談志であり、先代の円楽であり。噺家の間(ま)を知ってますから、知っているというか噺家同士ですから、一番やりよかったです。その次が三波さんですか。あの方は噺家になりたい人だったんですが、ところが何かの事情でああいうトリオになった方です。だから、ある程度噺家の間を知っている方でしたからね。でも、やっぱりちょっと違いましたけどね。

―― 司会によって違うものなんですね。

大変な違いがあります。私が笑点の司会をやったときに周りから、笑点をどういうふうに変えていくんですかと言われたんです。だけど、変えないと言ったんです。変えようと思ってそこに手を加えるから失敗するんですよ。変えるというのは、自然に変わるのを待ってること。やっていくうちに変わりますよ、それは。先代の円楽さんには円楽さんの味がある、談志さんには談志さんの味がある。それで徐々に変わっていったわけですからね。だから、変えないと言ったんです。自然に変わるのを待つんだと。私が笑点をやり始めた当時のテープとやめる間際のテープを見ますと、やっぱり変わってますよね。どう変わってるんだと言われると困るんですけどね。

―― 笑点の新しい司会の昇太さんにも違和感が無くなってきました。やはりそうやって変わっていくものですね。



やっぱりそこは慣れですよ。やるほうの慣れと見るほうの慣れ、両方ありますよね。

―― 初心者にもわかりやすい話をしてくれる落語家さんもいるので、落語を実際に聞きに行けば楽しんでもらえると思うのですが、なかなかその一歩を踏み出すのは勇気がいります。

皆さんそうだと思うんですけど、何でも分かりやすく、それが信条だと思うんです。落語を初めて聞く方もいるんですから、初めて聞く方に難しい噺をしたって分かるわけがないですよ。「何だ、落語つまんねぇじゃねぇか」と思われたらえらいことになりますから。分かりいい話をすれば分かっていただけるんだから、おもしろいとお思いになると思うんです。その落語への入門書が笑点だと私は思っています。だから、笑点から落語に入ったという方は随分いらっしゃいます。よく言うんですが、落語を好きになるのもご自由だし、落語家を好きになるのもご自由だと。とにかく落語を聞いてくれということをお願いします。

落語には必ず大なり小なりサゲ(話の落ち)というものがついています。言っちゃ失礼ですけれども、今の漫才師さんやコントにはサゲがない。「そんなばかな」、「冗談じゃない」と言っておしまいでしょう。昔の漫才師さんやコントみたいにサゲつけろっていうんですよ。昔、夢路いとしさんにしろ、ダイマル・ラケットさんにしろ、みんなちゃんとサゲがついてましたよ。ああいうふうにしてもらいたいですよね。

―― 歌丸師匠が落語で心がけていることは。

これは他の人はどうなのか知りませんけれども、私は、お客様を「笑わせる」んじゃないんですよ。「笑っていただく」んですよ。落語を「しゃべる」んじゃないんですよ。「しゃべらせてもらう」んですよ。「聞かせる」んじゃないんですよ、「聞いていただく」んですよ。そういう心がけがなかったら絶対我々はだめだと思う。これはほかの人には言いませんよ。自分で心がけていることです。

―― 師匠レベルでそういうお心構えなんですか。

笑わせよう、聞かせようと思うと、やっぱり芸がくさくなってくる。そこにどうしても無理が出てくるから。先代の小さん師匠が言った「自然体」、これが一番いいことだと思いますけれどもね、なかなか今はそうもいかないんですけどね。みんな笑わせようと思うから、無理に突っ込み無理に突っ込み、そんなことやってたらお客さんはくたびれちゃいますよ。でも、しょうがないです。それは個人個人の意見ですからね。

―― 落語の未来について。

落語家として落語家に望みたいことは、人間に年代があるのと同時に、落語にも年代があると思うんです。つまり、20歳代には20歳代の噺、30代には30代の噺があると思うんです。それをようく考えてやってくれと言いたいんです。それこそ20歳、30代の人間が「文七元結」や「死神」をやってどうすんだって言いたくなるんです。お客様に信用ないじゃないですか。「芝浜」だの何だのってそんな大きなネタばっかり。逆に、そういういい話をぶち壊している人間もいるわけです、変なふうにアレンジして。壊していい噺と悪い噺とある

わけですよ。絶対に壊しちゃいけない噺、そのままずっと伝統を守っていかなきゃいけない噺が。そういう区別もつかない噺家が多くなってきた。これはどこかで締めなきゃいけないんですよね。

―― 私たちの仕事も20歳代でも弁護士になれば「先生、先生」と言われる仕事ですけども、年代によって色々と考えなきゃいけないところがあります。師匠は、弁護士とのかかわりは今までありましたか。

いや、それはないですね。弁護士さんの商売も大変だと思いますよ。今、「先生」と言われるとおっしゃいましたけどね、「先生」っていう言葉はいいんですよ。だけど、字に書くと「先」に「生まれる」とありますからね、もっと悪く言うと「先ず生きている」ということなので、「先生」って余りいい言葉じゃないんだよね。「何々さん」と言われたほうが親しみが湧くと思うんですよね。私たちだって「師匠」と言われるよりは、「歌丸さん」と言われたほうが親しみは湧きますよね。もっとも、「師匠」と呼ばないと返事しねえやつもいるんですけどね。だけど、それじゃあ大衆演芸としては通用しないと思うんですよね。先々代の春風亭柳橋先生が色紙によく書く言葉に、「先生と言われるほどのばかでなし[※1]」というのがあるんですよね。うめえやと思ってね。

―― 弁護士も「先生」と呼ばれるのが当然といった気持ちが出てきますから、肝に銘じておきます。本日は貴重なお話をありがとうございました。

(Interviewer:伊田真広 Photo:髙廣信之)

※1 (先生という敬称が必ずしも敬意を伴うものではないことから)先生と言われて気分をよくするほど、馬鹿ではない。また、そう呼ばれていい気になっている者をあざけって言う言葉。

あなたを一人にしない 弁護士があなたのもとへ
大阪弁護士会 総合法律相談センター TEL 06-6364-1248